

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02473

研究課題名(和文)1816年夏シェリー・バイロン・サークルの文学的交流の領域横断的研究

研究課題名(英文)A Transdisciplinary Study on the Literary Exchanges among Shelley-Byron Circle that Took Place in the Summer of 1816

研究代表者

阿部 美春 (ABE, Miharuru)

立命館大学・言語教育センター・非常勤講師

研究者番号：60449527

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『フランケンシュタイン 現代のプロメテウス』のミリュウの領域横断的な解明をめざし、(1)1816年夏シェリー・バイロン・サークルの文学的交流の検証、「現代のプロメテウス」を18、19世紀の知的枠組から検証、テキストのドイツ的要素の緻密な再検証を行った。(2)「プロメテウス」に着目し、従来プロメテウス表象研究の射程外であった女性詩人を掘り起こし検証した。日本シェリー研究センターと連携し、内外の専門家の知見を得て、ロマン派第二世代の文学活動の新たな眺望を得た。また時代のプロメテウス・カルトの多義性と、アイスキュロスの継承者をロマン派女性詩人からヴィクトリア朝女性詩人まで跡づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀後半から見直しが行われ、正統派文学作品として認知され研究が一気に進んだ『フランケンシュタイン』を、作品誕生と出版から二百年という節目(2016-2018)に、改めて作品誕生の原点に立ち返り、文学にとどまらず、時代・社会・文化的背景の解明をめざした。内外の専門家の知見を得た領域横断的検証により、ロマン派第二世代の文学活動の新たな眺望を得ることができた。また、従来男性一辺倒であった時代のプロメテウス・カルトに、女性詩人の系譜を発掘し、一枚岩ではない時代の多義的プロメテウス像を明らかにした。二百年という節目の年に、講演、シンポジウムを開催、それらをまとめた本の出版により、社会の関心に応えた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to make a transdisciplinary examination on the historical, social, and cultural background of Frankenstein or the Modern Prometheus in cooperation with the Japan Shelley Studies Center and specialists inside and outside Japan. (1) The study examines the literary exchange among the Shelley-Byron Circle that triggered the birth of the work, the leitmotifs as the episteme, and the German influence intrinsic and extrinsic to the work. (2) The study uncovers and investigates works with Promethean motives by female authors in the context of the cult of Prometheus prevalent among contemporary male artists. These reveal (1) the multi-faced literary activities of the second generation Romantic authors. (2) another aspect of the Romantic Era Promethean cult and another vein of Aeschylus's Prometheus. Finally, the results of the research are organized to be made available to the public under the title of The Age of Frankenstein, Bicentenary Essays.

研究分野：人文学 神話の視点による、イギリス・ロマン派女性詩人の研究

キーワード：プロメテウス フランケンシュタイン ロマン派女性詩人 レティシア・エリザベス・ランドン メアリ・シェリー シェリー・バイロン・サークル エリザベス・バレット・ブラウニング 科学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

『フランケンシュタイン』研究は、20世紀後半に著しい進展をみたのであるが、その背景には文学キャンノンをはじめ西洋近代の価値観の再検討、ポストモダニズム、ゴシック再評価、SFとフェミニズム批評理論の隆盛があった。とりわけSFとフェミニズム批評は、研究は大きく進展させた。まず1970年代オールディスがSF史『十億年の宴』(73)で、ゴシックの継承者、科学と人間のあり方を問うSFの起原と位置づけ、ポップカルチャーのアイコンにとどまらない評価の先鞭をつけた。フェミニズム批評では、モアズ『女性と文学』(76)、ギルバートとグーバー『屋根裏の狂女』(79)が、重層的な話りの深層に、ブルームの「影響の不安」では説明できない、「女性であることの不安」や「書くことの不安」を描く作品として、新たなキャンノンの文学史に位置づけた。さらに1980年代、90年代「メアリ・シェリー・ルネサンス」と呼ばれる研究進展期には、スピヴァク(85)やハラウェイ(85)をはじめとする、西洋的主体の普遍性を疑問視する「ポスト構造主義」を経た文学批評が、西洋的二項対立や他者表象の矛盾を浮き彫りにするテキストとして、『フランケンシュタイン』に新たな意味を見出した。これらの批評は、西洋文化の二大起原神話、「創世記」とギリシア神話を経系に、西洋近代の拡大と発展の神話を緯糸に紡がれた作品の怪物表象に、神話の呪縛の犠牲者と批判者の視点を読み解いて、研究の大きな潮流を作った。またこの時代、それまで入手が困難だった書簡集(80, 83, 88)、日記(87)、作品集(96)をはじめ一次資料が相次いで刊行されたことも、研究を進展させた。メアリ・シェリー生誕二百周年の1997年には、内外でシンポジウムが開催され、文学史におけるキャンノンの地位を確たるものとした。21世紀に入ると、ロビンソン編『オリジナル・フランケンシュタイン』(08)が、作者をめぐる論争に終止符を打ち、さらなる研究の道を整えた。こうした背景をふまえ、作品誕生と出版二百周年の2016年～2018年は、今一度作品誕生の原点に戻り、文学にとどまらず、時代、社会、文化的背景の解明をめざした。

2. 研究の目的

本研究の目的はふたつある。(1)1816年夏シェリー・バイロン・サークルの文学的活動の検証。文学史では専ら醜聞として語られ、ケン・ラッセル(86)やゴンザロ・スアレス(88)の映像によってそのイメージが定着した感のある1816年夏シェリー・バイロン・サークルの文学的交流とその時代・社会・文化的背景の再検証である。従来、研究の焦点はロマン派メジャー詩人シェリーとバイロンそして20世紀後半以降メアリ・シェリーが加えられたが、本研究では、クレア、ポリドリといった等閑視されてきた周辺的存在に焦点をあて再検証することとて、ロマン派第二世代の文学運動の裾野の解明をめざす。

また、従来詩人たちの交流地ジュネーヴへの関心は、ルソーの聖地と、物語着想の源である崇高なアルプスが焦点となっていた。ジュネーヴとルソーについては、川合清隆『ルソーとジュネーヴ共和国』(2007)等の先行研究があるが、ロマン派第二世代をめぐるはまだない。本研究では、専門家を招聘して、社会・文化的風土について新たな眺望を得ることをめざした。

(2)女性詩人のプロメテウス表象研究。本研究は、副題「現代のプロメテウス」の含意を、女性詩人を視野にいたれた時代のプロメテウス・カルトとの関連で検証することをめざす。プロメテウス神話は、「18～19世紀初頭ロマン派と革命支持者を魅了してやまない神話」として、文学にとどまらず、絵画、音楽など多岐にわたる作品に素材を提供し、古い価値観や体制に挑み新時代を切り拓く人間の表象となった。「現代のプロメテウス」誕生の年、バイロンは「プロメテウス」、翌年プロメテウスのヒーローの『マンフレッド』を、シェリーは後に『縛めを解かれ

たプロメテウス』(1820)を書き、自恃と反逆精神に満ちた理想の自画像を重ねた。現代、科学による自然支配がプロメテウス主義と呼ばれ、原子力がプロメテウスの火の比喻で語られることを考えるならば、メアリの「現代のプロメテウス」は、先見性と同時に、男性詩人たちのプロメテウスとの懸隔が際立つ。本研究では特に、従来注目されることのなかった女性詩人の作品を掘り起こし、検証に加えることで、一枚岩ではない時代の多義的プロメテウス像の解明をめざすものである。

3. 研究の方法

本研究の射程は広く、(1) 1816年夏シェリー・バイロン・サークルの文学的活動の検証。研究代表者が会長をつとめる日本シェリー研究センターと連携し、2016年から2018年、文学にとどまらず内外の専門家を招聘して講演とシンポジウムを持ち、知見を広げることをめざした。(2) 女性詩人のプロメテウス表象研究。個人では文献収集と研究を行い、その成果を発表した。資料は、購入および、入手不可能なものは大学図書館を利用、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーで資料調査を行った。また新たな知見を得るため、(1)と同様、専門家を招聘してシンポジウムを行った。

4. 研究成果

本研究の成果は、研究代表者と研究協力者木谷巖が編集、出版した『フランケンシュタインの世紀』(*The Age of Frankenstein Bicentenary Essays*) に集約される。これは、個人研究および、日本シェリー研究センターと連携し、内外の専門家を招聘して行った講演とシンポジウムから得た知見を収めたものである。

(1) 1816年夏シェリー・バイロン・サークルの文学的活動の検証。この成果は、シェリー研究センターと連携して行ったシンポジウムと講演によるものである。以下、年ごとの成果を記す。2016年は、18世紀フランス思想および18、19世紀表象文化論の専門家阿尾安泰氏と、バイロン専門家相浦玲子を招聘し、シンポジウム「1816年夏ジュネーヴ湖畔におけるシェリー・バイロン・サークルの文学的交流」を行った。阿尾氏の「18世紀から見た『フランケンシュタイン』」は、18世紀から19世紀への連続性を自明とする、従来の視点からは見えてこなかった時代の刻印を明らかにし、フランケンシュタインの研究や創造物の言語獲得に、知識や認識をめぐる枠組の変化を、家族願望が恐怖として描かれるところに、新たに形成されつつあった国民国家による支配の浸透と内面規律化の悪夢を読み、「現代のプロメテウス」を副題とするテキストにそれぞれの世紀の刻印を明らかにした。相浦氏の「ディオダーティ荘における集い 恐怖小説の二つの系譜の始まりと、隠された関係」は、1816年の交流のもう一つの成果「ヴァンパイア」の系譜と、シェリー死後も続いたバイロンとメアリの交遊を辿り、従来の研究が等閑視してきた交流に、スキャンダルにとどまらない多産な成果と、その背景にある「人間模様」を明らかにした。

2018年は、ドイツからロマン派の専門家クリストフ・ボード氏を招聘し、講演「Germany in Frankenstein」を行った。従来ドイツ的なものの影響として挙げられてきた、1818年序文で言及された「ドイツの生理学者」、ドイツの幽霊小説伝語版『ファンタズマゴリアーナ』、インゴルシュタット大学、フランケンシュタイン城について、資料の緻密な検証にもとづき、従来の解釈の真偽を実証したことの意義はきわめて大きい。

2017年のシンポジウム「The Scientific Shelleys ～ 「パーシー+メアリ+科学」の新たな解答」は、本研究以前から企画されていたのであるが、期せずして時代・社会・文化的背景の検証に、新たな知見を与えられるものであり、鈴木里奈氏「『フランケンシュタイン』における自然科学と決定論」、宇木権一氏「The Tempest of the Shelleys - A Wind of Lucretius' Atomism」、そして新名ますみ氏「拡大する循環 — Shelley と Mary の科学観に普遍性を求めて」を『フランケンシュタインの世紀』に収めている。

(2) 女性詩人のプロメテウス表象研究。個人研究では、従来のプロメテウス研究において着目されることのなかったロマン派女性詩人・作家の作品を発掘、検証し、男性詩人の、自恃と奔放不羈の精神に満ちた理想の自画像としてのプロメテウスに対して、苦悩を通して共感関係を結ぶ、もう一つのプロメテウスを明らかにした。理性の火をもたらすプロメテウスの嚆矢を、メアリ・ウルストンクラフトに、苦悩を通して共感を喚起するプロメテウスを、ロマン派第二世代のレティシア・エリザベス・ランドンに跡づけた。ランドンのプロメテウスは、苦悩を通して共感関係を結ぶという点でアイスキュロスの真正な継承者であるが、ゼウス不在という点で同時代の男性詩人とは異なる。従来の研究では取り上げられることがなかった女性詩人を掘り起こすことで、時代のプロメテウス・カルトの多義性を明らかにすると同時に、ロマン派プロメテウスの系譜に新たな眺望を開いた。これら個人研究の成果は、2017年関西コールリッジ研究会で「女性詩人と「プロメテウス」 — フェリシア・ヘマンズとL.E.L.」、2018年日本シェリー研究センター大会シンポジウムで「苦悩するプロメテウスの後裔 — ロマン派女性詩人のプロメテウス」として発表した。

2018年、シェリー研究センターと連携して、19世紀イギリス小説の専門家廣野由美子氏を招聘し、日本シェリー研究センター会員であり、イギリス・ロマン派、特にシェリー・サークルの専門家アルヴィ宮本なほ子氏の協力を得て、シンポジウム「プロメテウス・カルトと『フランケンシュタイン あるいは現代のプロメテウス』」を行い、研究代表者はパネリストとして参加した。成果は上述のものである。廣野氏の「「現代のプロメテウス」とは何か? 『フランケンシュタイン』再読」は、神話の起原ヘシオドス、アイスキュロス、オウィディウスに立返って「現代のプロメテウス」を再検証し、理想像として描かれたロマン派のプロメテウスとのずれ、神話の大胆なパロディ化を指摘し、メアリの「現代のプロメテウス」の先見性と独自性を明らかにした。アルヴィ氏の「7つ目のC — 「モダン・プロメテウス」への批判的応答 — 」は、シンポジウムにおける廣野氏と本研究代表者のプロメテウス論を西洋文化の伝統の中に鳥瞰するのみならず、ヴィクトリア朝女性詩人エリザベス・B・ブラウニングのプロメテウス翻訳に、その継承を跡づけ、女性詩人のプロメテウスの系譜に新たな頁を加えた。

本研究の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望。1960年代ハロルド・ブルームは、ロマン派詩人の時代を「立ち上がるプロメテウス」の時代と命名したが、運命に抗して闘うプロメテウスは時代精神と共鳴し、新時代を拓く英雄は「新プロメテウス」の名で呼ばれた。こうしたプロメテウス・カルトに、従来の研究で着目されてこなかった女性詩人を発掘することで、プロメテウス・カルトの多義性を明らかにし、さらにその系譜をロマン派にとどまらずヴィクトリア朝まで跡づける本研究が、プロメテウスの系譜の新たな頁を開く端緒となることを期待したい。『フランケンシュタインの世紀』刊行後得た科学関係の専門家の反響からは、本研究のめざした領域横断的研究の新たな可能性の示唆を受けた。最後に、本研究が2018年のシンポジウムと講演を通して、アメリカのシェリー・キーツ協会の呼びかけに応じて世界各地で行われた、作品の現代的意義を問う、出版二百周年記念企画 Frankenreads に参画し、『フランケンシュタイン』研究にささやかな貢献ができたことを記しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿部美春
2. 発表標題 苦悩するプロメテウスの後裔ーロマン派女性詩人のプロメテウス
3. 学会等名 日本シェリー研究センター
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阿部 美春
2. 発表標題 女性詩人と「プロメテウス」ーフェリシア・ヘマンズとL.E.L.
3. 学会等名 関西コールリッジ研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本シェリー研究センター編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪教育図書株式会社	5. 総ページ数 180 + v
3. 書名 『フランケンシュタインの世紀』(The Age of Frankenstein Bicentenary Essays)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	笠原 順路 (KASAHARA Yorimichi) (00194712)	明星大学・教育学部・教授 (32685)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	木谷 巖 (KITANI Itsuki) (30639571)	帝京大学・教育学部・准教授 (32643)	